概　要　報　告

実 施 期 日	８月２日(金)
部　会　名	中学校　特別の教科　道徳部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『発問の工夫』による３学年での活発な議論をめざす

提案概要

第３学年は何事においても真摯に取り組み、雰囲気も良いが、仲間に共感しようとする意識が強く、互いに言いにくい意見を出したり、活発な議論をしたりすることができない。

そこで、第３学年での授業をさらに主体的、対話的にし、工夫を加えて生徒の心を動かしながら行う授業をめざすために、以下の①～④に取り組んだ。

① 年間行事に合わせた年間指導計画の作成、実践

→教科書の順番どおりではなく、年間行事に合わせて学ぶことができるよう、年間指導計画を順を作り変えて作成した。

（成果）指導者が教科書の各項目について話題を取り上げやすくなった。

② １人１人が臆せず意見や考えを発信できるようなＩＣＴ教材を活用した工夫

→Jamboard やポジショニングなどのアプリを用いて生徒が意思表明をしやすくなるような工夫を取り入れた。

（成果）新しいアプリ(ポジショニング)の活用と同時に、既存のツール(ホワイトボード)も有効的に活用することで、生徒の考えの変容がみられた。

③ 教材ごとの課題を事前に学年で共有し、検討してからの授業実践

→前年度に出た教科書の教材ごとの課題をもとに、当年度に教材を効果的に使用することができるようにした。

（成果）反省を活かしながらＩＣＴを活用した深い学びに繋げることができた。

④ 議論を深めるための発問の工夫

→主となる発問を１つにしぼることで議論時間を１５分以上確保した。議論を深めることで、生徒の心の動きが大きくなることを図った。

（成果）発問を１つに絞ったことで、時間をかけて行うことや、生徒が様々な観点から物事をみることに繋げることができた。

＜授業実践例＞ ※授業の工夫と、授業後の振り返り

〇授業１回目「好きな仕事か安定か悩んでいる」

(工夫)・ＩＣＴを活用し､スライドでテンポよく複数の質問を出すことで話合いの時間を確保する。
・生徒から多くの意見を引き出し、そこから議論を活発にさせる。

→授業内に内容を終え、生徒たちは発問にスムーズに答えていた。しかしまだ『生徒の心の葛藤を生み、考え抜く道徳の授業』にはなっておらず生徒同士の議論に進むことはできなかった。発問の設定の仕方や研究研修、学校での共有が必要であると感じた。

〇授業２回目「埴生の宿」

(工夫)･質問しながら生徒の思考を引き出すことと、ＩＣＴでスライドを使用した授業は継続する。
・質問を極力少なくし、補助質問を用意することで臨機応変に対応できるようにする。

→生徒は指導内容の理解はできた。しかし、主体的で対話的な学びがあったとはいえなかった。補助質問で生徒間に葛藤を生むことはできた。しかし、生徒がこちらの質問に個々で答えるだけになってしまった。もっと発問を工夫し、少なくすることで多くの発言や葛藤を生むよう、あらかじめ一定の議論する時間をつくるべきであると確信した。

〇授業３回目「二通の手紙」

(工夫)・発問を１つにしぼり、グループ協議の時間を確保した。発問の完成までに、学年や市の道

徳部会の助言を求め、検討を重ねた。
・グループ協議の前後で生徒の変容を見るかたちをとった。意見が分散しなかった際の補助質問を用意した。
・発問に対する生徒のスタンスがわかりやすくなるアプリのポジショニングを使用する。中立も含め、各々の位置にいる理由も意見として表現させる。グループでの意見交換での意見の可視化にはホワイトボードを活用する。

＜授業３回目を実践した成果と今後の課題＞

（成果）

・仲間と活発に議論するなかで考え、自分の意見をもつことができた。
・事前に各担当や担任、学年等で検討、協議を重ねたことで、考えを揺さぶり、生徒同士の議論を深める授業改善につながった。
・発問を１つに絞ったことで、時間をかけて行うことや、生徒が様々な観点から物事をみることに繋げることができた。

（課題）

・指導内容を指導者側が押し付けることで、生徒の思考や自然な気づきを奪ってしまうこともあるように感じた。
・活発な議論のなかで、学び合う授業をどのように続けていくかが課題である。そのためにも発問の吟味と話合いのツールについての検討を続けていく必要がある。

質疑応答

Ｑ１：ＩＣＴを活用した議論を活発にさせるというのは校内研究のテーマなのか。
Ａ１：鎌倉市の道徳部会のテーマとなっているものです。
Ｑ２：グループ協議にこだわった理由は何か。
Ａ２：議論にこだわったので、大人数ではなく少人数のグループ協議を実践した。

協議の柱及び協議概要

『主体的・対話的で深い学びをするための活発な議論を促す工夫・手立て』
各校での道徳の授業への取り組み方や実際にやってきた方法などを話し合うことができていた。
４人での話合いとワールドカフェ方式を用いて様々な意見を先生方に見てもらうことができた。
＜具体的な意見＞
・小学校では心情を顔マークで表すなどの工夫をしている。
・教材について学年会で話し合うことができていないが、教材を効果的に使うためには事前に話し合うことが必要に感じた。
・生徒が深い学びに行きつくまでにこちらが求めている答えを出そうとしてしまう。補助教材や補助質問で、答えが出ないまま終わるときもあってよいと感じた。
・学びを深めるために、自分の体験をふり返るスライドは効果的だと感じた。
・Ｙ(やったこと)Ｗ(わかったこと)Ｔ(次は？)というＹＷＴの３つのポイントを大切にし、次の生活に生かしていくことが重要である。

まとめ概要

今回の研究授業のポイントは大きく分けて２つある。１つはポジショニングを使って表現するなかで、『意見に白黒つけなくてよい』ということ、『意見を変えてよい』ということを伝えながら授業を進めたことで、生徒自身も考えの変化を大切にすることができた。もう１つは発問の検討である。学年や部会で発問を吟味したことで、教師も子どもと同じように自分ごととしてとらえて考えることができた(学びの相似形)。それによって生徒がじっくり時間をかけて考え議論する場面をつくることができ、自分ごととして考えさせることができた。

道徳を学ぶ際、子どもたちはスムーズに内容を理解し、自分で考えて表現することはできる。しかしそれだけでは深い学びには繋げられない。だからこそ『議論』を入れることで『自分ごと』として深く考え、自身のこれからの生活に繋げることができるようになっていく。また、他の子の考えと比べることでも自分の道徳的価値を見つめなおすことができる。子どもたちから問いや意見が出てきて、子どもたちの主体性が引き出され、学習者中心の学びになっていくことが大切である。